

進捗状況の概要【1ページ】

【共通の成果指標と達成目標】

設定した定量的指標においては、概ね順調に推移しており、各取組の進捗状況は下記のとおりである。

■国際化関連

本学の研究者や学生等を対象にノーベル賞やフィールズ賞受賞者等のトップ・グローバル・スカラーによる講演や、英語で日本について学べる学部横断型教育の国際総合日本学（Global Japan Studies）教育プログラムを実施した。従来の英語による学位取得プログラムである教養学部のPEAK（Programs in English at Komaba）に加え、3年次編入によるグローバル基礎科学教育プログラムGSC（Global Science Course）を理学部に設置した。更に国際卓越大学院コースとしてGSGC（Global Science Graduate Course）を開設する等、国内外の優秀な学生に対する修士・博士課程一貫の教育・研究を進めるとともに、メディカルアシスタントサービスを導入する等様々な活動を行い、外国人留学生・研究者の生活支援の充実化を図った。

■ガバナンス改革関連

企画広報・教育推進・学生交流の3部門で構成されるグローバルキャンパス推進室を国際本部の下に設置し、部局ごとで個別に進められてきた国際的な展開を全学で協議しながら推進した。戦略的パートナー校等を訪問する係長以上の職員を対象とした海外研修や英語ならびに中国語研修を実施し、職員の意識改革と国際業務を担う職員の当該言語による対応能力の向上を図り、グローバル仕様の職員育成を推進した。平成28年度には世界各国から有識者15名を招いてプレジデント・カウンシルを開催し、本学のビジョンや取組に対して助言と提案を受けた。更にこれを発展させグローバル・アドバイザリーボードを設置した。

■教育改革関連

学部教育の総合的改革として、平成27年度から始まった4ターム制による学事暦は順調に推移しており、キャップ制や成績評価の厳格化等学びの質を向上させる取組に加えて、早期卒業制度等優秀な学生の主体性を高める仕組み作りにも取り組んだ。平成29年度からは学部において科目ナンバリング制度の導入が決定しており、一層の学びの実質化・高度化の進展を目指している。平成28年度入学者選抜より、本学では初めての推薦入試を実施している。判定の材料として国際バカロレアも活用しており、多様性豊かな学生構成の実現と学部教育の更なる活性化に取り組んだ。グローバルリーダーを全学で養成する学部3年次対象のプログラムGEFIL（Global Education for Innovation and Leadership）を開始した。選抜学生を対象として、分野横断型の特別教育プログラムを提供し、サマープログラム等の国際的な学習体験を積極的に組み入れ、海外トップクラスの大学の研究者・学生、企業や国際的な専門家との出会いや交流を通じ、参加学生が主体的にグローバルリーダーとしての実践力を身に付ける環境作りを行った。

■国際的評価の向上につながる取組

世界トップクラスの研究型大学11校からなるIARU（International Alliance of Research Universities）の学長会議をはじめ、AEARU（Association of East Asian Research Universities）総会、AUA（Asian University Alliance）等に参加し、本学の国際的な評価とプレゼンスの向上に努めた。

海外の大学とより緊密で創造的かつ柔軟で特別な協力関係を全学的に構築することを目的とする取組として、主に複数部局により主導される「戦略的パートナーシップ大学構築プロジェクト」を平成26年度から開始し、26大学との延べ65プロジェクトを支援した。平成28年度にはこれらの大学に本学の約400人の学生と約400人の研究者を派遣し、パートナー校より約300人の学生と約200人の研究者を受け入れた。平成27年度までに、5大学と戦略的パートナーシップ協定・覚書を締結し、平成28年7月にソウル大学校とも同様の協定を新たに締結した。同プロジェクトと連動して全学的なシンポジウムを実施する等学生・教職員の教育研究活動を促進するための全学的な協力関係を一層充実させることに努めた。

【本学独自の達成目標】

設定した定量的指標については、概ね順調に推移している。また、定性的指標として設定した(1)戦略的パートナー校との交流実績増加、(2)地域等に固有の学術的価値の国際的な発信の拡大、(3)グローバル仕様の組織・職員配置充実の内、(1)については、特筆すべき事例が多い。(2)については文系部局が協働し、ヒューマニティ・センターを新たに設置して、人文学研究の高度化、国際発信の強化を図っている。(3)については、職員能力の向上には進捗が見られるが、その組織化については全学的な事務組織改革の方針と併せて、平成30年度に実施段階に入る予定である。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1 ページ】

■戦略的パートナー大学の構築

学内の極めて多数の部局、専攻、研究室、教員、レベルで実施されている卓越した共同研究を基盤として、教育交流を効果的に推進するために、部局や分野の垣根を越えた連携を形成することに成功した。相手大学との戦略的な枠組を議論する過程で、あらたな流動性をもたらす文理の連携等多様な研究教育が進展し、共通的な課題解決に向けた分野融合の試みや、大学院生に加え、学部生の相互交流も促進されている。主要な戦略的パートナー校（オーストラリア国立、UC バークレー、ケンブリッジ、スイス連邦工科、ソウル、プリンストン、北京、MIT、清華、ストックホルム大学群（ストックホルム、KTH、カロリンスカ）との間には、互いにパートナーとしての認識が共有されつつあり、お互いの特徴や強みを生かす新たな連携の枠組が構築されている。ケンブリッジ大学との間には戦略的パートナーシップの覚書が締結され、両大学による多分野合同シンポジウムを2回開催し、共通課題である教育連携について議論してきた。学部教育制度の相違によって従前は進んでいなかった「学部生の交換」の意義と実施法に向けた議論が継続されている。ストックホルム大学群からは、連携して本学との戦略的なパートナーシップを構築したい旨提案があり、SDGs を基盤とする分野横断的共同研究の推進、FD の合同実施、合同学生短期プログラム等が、文理の多くの部局や機関に所属する教員同士の円滑な連携の元に展開されつつある。スウェーデンと日本との国交樹立 150 周年イベントとして今秋、日瑞学術フォーラム”Healthy Ageing”を実施する準備を進めており、新たな共同研究を開始するための議論を行う予定である。今後は、共同研究活動を基盤に教育面での連携の深化を目指す。北京大学及び清華大学との間には、長きにわたり育まれてきた研究教育の交流があり、そのような信頼関係に基づいて大規模な事務職員の相互交流を実現した。特に国際業務担当以外の中堅職員がお互いの活動を認識し、教育研究活動の質的、量的向上のためには連携が極めて重要であることを認識することは大きな意義がある。以上のように、研究型総合大学としての本学の特性を生かした特別な関係を構築し、多様で質の高い成果が多数創出されている。

■日本語学習教材の開発と日本語教育の組織的取組

学内多数の日本語教室で、e ラーニング教材等学習者のニーズに合わせた多様な日本語学習教材が開発されている。また、留学生、外国人研究者が良質かつ適切な日本語や日本文化に関する教育を受けられるように、これまで学内で個別に実施されてきた教育体制を強化するため、ネットワーク化した日本語教育のための組織の検討ワーキング・グループでの議論を行い、日本語教育に係る学内ネットワークや対外的な情報発信窓口等にも対応する日本語教育連携企画室（仮称）構想を策定できた。

■留学生数の大幅な拡大と生活支援体制等の充実

本学の留学生数は、平成 25 年度の 2,933 人に対し、平成 28 年度は 4,414 人に拡大し、本事業の指標目標達成の見通しがついた。留学生の生活支援として、①各種イベントや業務の多言語化における学生スタッフの活用、②留学生向け情報提供の拡充（学内相談施設案内の多言語化やメンタルヘルス支援のための英語版ハンドブックの作成、学内の学生生活への参加を促す学内サークル情報の英語化）、③留学生支援拡充に向けた調査の実施（海外有力大学等の調査・意見交換、留学生を対象とした生活実態調査、居住スペースのニーズ調査の実施）、④住居支援の拡充（東京都宅地建物取引協会文京支部と協力した、冊子「部屋探しの基礎知識」（日英中）の作成、留学生の住居斡旋提携制度の締結、新宿舍への留学生居室枠や入居者への経済支援の確保）、⑤生活支援の拡充（留学生向け 24 時間 365 日の医療等相談（日英中）の継続実施、学内食堂・購買部でのハラル対応の拡充、家族向け生活オリエンテーションの実施や家族向け生活ハンドブックの発行）、⑥就職支援の拡充（日本国内に止まらない国外でのキャリア形成も視野に入れた就職支援の開始、本郷・柏に加え駒場キャンパスでも留学生向け就職セミナーを開始）等を行い、体制の充実を図った。

■全学対象のサマープログラム等の短期プログラム

本学の学部及び大学院学生が海外で短期間滞在し、コミュニケーション能力と問題設定と解決力の向上を目的とした短期プログラムを拡大している。これまでに、北京大学、香港大学、ソウル大学校、国立台湾大学と短期プログラムを各大学にて合同で実施している他、本学より協定校（シェフィールド大学、UC サンディエゴ、インドネシア大学）に依頼し、本学の学生向けにカスタマイズされた短期プログラムを実施してきた。これらのプログラムでは、当地における本学同窓会組織と協力して懇談の場を設ける等、参加した学生に目的を越えた広い体験の場を提供し、好評を得ている。